

KAGAWA GALAXY

「吉田源治郎・幸の世界」(28)



第28回 『肉眼に見える星の研究』(8)

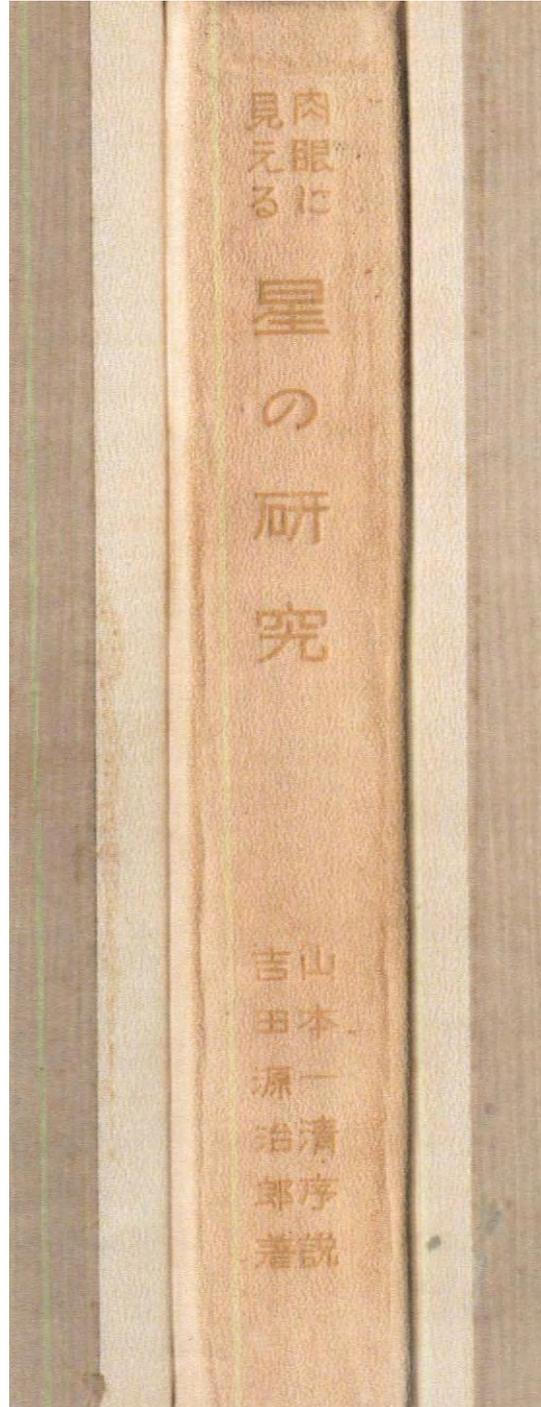
過日(7月1日)午後、一麦保育園に於いて、森彬牧師(若き日に吉田源治郎より西宮一麦教会で洗礼を受け、1971年3月から2005年3月まで34年間にわたり、この教会を牧会)から、源治郎に纏わる貴重なお話を2時間余り、吉田撰氏、梅村貞造氏、元正章牧師、そして私(鳥飼)4人がたっぷりとお聴きした。「源治郎先生はうな井が大好きで、温泉もお好き、よく宝塚温泉にも出向かれた」・・とか、お許しをえて今回も録音もさせて頂いている。

この度も吉田撰氏より以下の新しい関係資料をお預かりしたのでリストにして置く。

吉田撰しより関係新資料預かり分

(2010年7月1日)

- 1 『肉眼に見える星の研究』(大正11年初版)箱入り
- 2 「雲の柱」大正14年関係コピー3枚
- 3 「火の柱」大正15年以下関係コピー13枚
- 4 1964年 琉球伝道記録(写真在中)
- 5 1972年 賀川ハルの吉田幸宛書簡
- 6 1978年11月25日 キリスト新聞コピー キリスト教功労者表彰式
- 7 1980年 イースター早天礼拝 芹野牧師の吉田宛書簡
- 8 1980年 朝日新聞太田緑の吉田宛書簡(写真在中)
- 9 1984年 吉田源治郎牧師告別式次第
- 10 1984年 吉田源治郎先生告別式記録
- 11 1984年 吉田源治郎告別式(田中芳三)コピー
- 12 1984年 吉田源治郎先生「追悼」



13 2005年 新「いちばく」30号
その他、貴重な写真多数

「箱入り初版本」が見つかる！

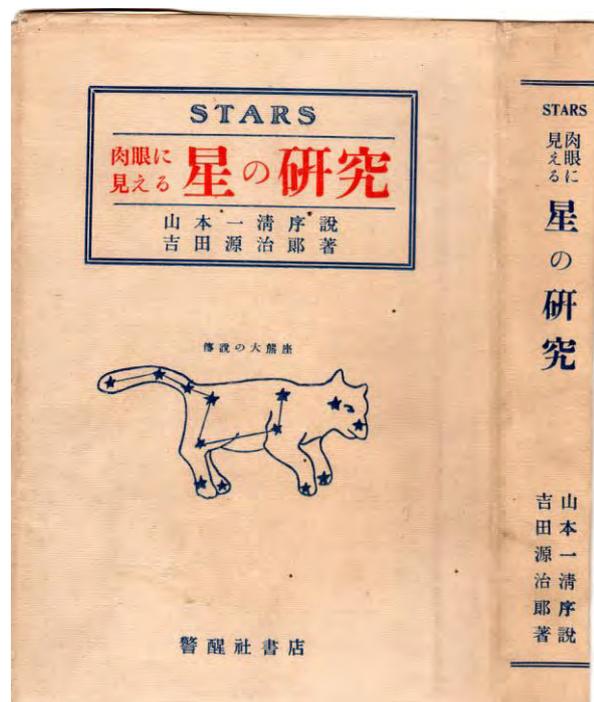
この項は前回で区切りを付ける予定でいたが、この度お預かりした新しい資料（リストの1番）に、嬉しいことに『肉眼に見える星の研究』の「箱入り初版本」があったのである。既述のとおり、初版の宣伝広告には「箱入上製美本」とあるのに、私の手元の初版はそれが欠けていて、どんな装丁だったのか是非見たいと願っていた。それがここに来て、直に手にとって見る事が出来たので、早速皆様にご覧戴きたく、今回特別にアップして置くことにした。

冒頭に大きく収めたものが、箱の表紙と背である。少々くすみがあり、張り紙の剥がしがあるが、当時流行の装丁である。そして本体も殆ど痛みはなく、前頁に収めた様に美しい背文字がある。しかも本体上面は金箔になり、本文370頁、索引10頁、さらに折り込みの星図などの入った念の入れ方の著書である。

いま、この箱入り初版と、下に収めたカラー文字入りの「改訂増訂」を眺めていると、箱入りは恐らく初版のみで、「改訂増訂」には箱なしでいったように思われる。

それともうひとつ、同じ初版で奥付の発行日も「大正11年8月20日」と同じであるのに、今回預かった「箱入り初版」には、あのテニソンの言葉と「伝説のプレイアデス」の絵が収まり、手元の初版にはそれがないことも判る。多分これは、手元のものが初版の最初のもので、「忽三版」と宣伝された時の版からはこれが加わって、それが「改訂増訂」へと受け継がれていったのであろう。

どうでもよいような細かなことであるが、これまでいくらか本作りに携わった経験から、一つの作品を世に送り出し、それが人々に受け入れられ、版を重ねて読み継



がれて行く経緯には、多少の興味も湧いて来るのである。

ともあれ、今回「箱入り初版本」をこうして眺めることの出来たことを、子供のように喜んでいる次第である。

実は、源治郎の『肉眼に見える星の研究』に関連して、まだ紹介できていない重要な資料が、幾つか残されている。

そのひとつは、源治郎が明治学院時代に内村鑑三の聖書研究会に深く加わり「柏木教友会」のメンバーであったこと等に関しては既に言及したが、源治郎が星に強い興味を抱くに至ったきっかけのひとつに内村の影響があったのではないかという点に関わるもので、次回にその論稿の一部を取り出して置かねばならない。

また、源治郎・幸の長女・敬子氏の素敵なエッセイ集に『憩いのみぎわ』（1992年）という作品があり、その中の「岩手公園」という箇所で、「源治郎と宮澤賢治」のこと、「賢治とタッピング一家」のことなどに触れたれているので、それも紹介して置きたいと思う。

そこで今回は、次のふたつだけを収めることにする。

ひとつは、山本進（山本一清のご子息）の「吉田源治郎の憶い出」をこれまで部分的に紹介してきたが、未紹介の末尾の部分の少しだけ。二つ目は、これも源治郎の亡くなった時、原恵が「星の本との出会い」という短文を『本のひろば』に寄稿していて、源治郎と山本一清などにも言及しているので、それをご覧に入れたい。

（2010年7月5日記す。鳥飼慶陽）

山本進「吉田源治郎の憶い出」より（「天界」1984年8月）

この本は今となっては昔の本というよりほかはないが、当時はアマチュアに対する啓蒙書であって、人を星好きにするのに役立ったことと思う。

吉田師には、自宅に来られた時のほか、戦前には賀川豊彦グループの集会（たとえば「イエスの友」の修養会など）でも時々お目にかかったが、星についてのお話をきいたことはなかった。

戦後にも数回、山本天文台に来られた。一度、賀川豊彦に随行して来られたことがあった。当時、賀川豊彦は推薦による貴族院議員であったが、左翼政党のクレームで登院停止扱いとなっていた。議員には国鉄の全線フリーパスが支給されていた。賀川は国会の束縛を受けることもなく、これを奇貨おくべしとして、全国を伝道してまわっていた。来宅の夜、近くの正休寺の本堂を借りて賀川豊彦をかこむ座談会が開かれた。

会場にしてみると、参会者の第1列に村の最左翼の闘士連が顔をそろえて賀川攻撃の機会を待っていた。これを山本から耳打ちされた吉田師は巧に賀川豊彦の談話を立体農業（クリ、クルミ、常緑カシ類の植栽）のお話に導き、猛者連を煙に巻いて一言もさせなかった。

最近はお目にかかることもなく、わずかにキリスト教年鑑の名簿簡でご健在を確認するばかりであった。昨秋、母が死んだ時には、幸夫人と連名の弔電をいただいた。こんどは私が電報を打つ番になった。

イエスニ従イテ、友ヲ導キ、星ヲ眺メテ、天上ノ音楽ヲ聞キ給イシ、吉田源治郎先生、
今、天ニ召サル、トコシエノイノチ、豊カニアレカシ」山本天文台、山本 進

吉田師は好奇心に満ち、邪気なく、努力家であられた。

謹んで、安らかな想いを得られんことを祈る。

原恵「星の本との出会い」

(「本のひろば」1984年3月号)



出会い・本・人 星の本との出会い——原 恵

ことしの一月八日、吉田源治郎牧師が長逝された。吉田先生(一八九一—一九八四)は賀川豊彦先生とほぼ同世代の方で、いろいろな方面で活躍された。

吉田先生には『新約外典の話』などの著作や訳書が少なくないが、ここで特に紹介しておきたいのは、『内眼に見える星の研究』(一九二二、警醒社)という天文学の入門書である。実は筆者も幼時から星に興味をもち、ちょうど今年で半世紀、星空を仰ぎ続けてきた。家人から星空のさそり座を教えられたのがきっかけで、すっかり星空の神秘のとりこになり、いまだにあきることがないばかりか、日進月歩の天文学の新発見を見聞きするたびに、宇宙の造化の妙にますますひきつけられてゆく。

筆者が初めて読んだ天文学の本は『天文の話・鉱物の話』(小学生全集、文芸春秋社)で、この本の天文の部分は当時の京大の山本一清教授(一八八九—一九五九)の筆で、同博士は一九二〇年「天文同好会」(現・東亜天文学会)を創立し開西を中心に数多くのアマチュア天文家を育てた。山本博士は人も知るクリスチャンで多くの教会関係の友人を持っておられた。当時、東京天文台やその系統である日本天文学会が象牙の塔にこもり、アマチュアの育成に不熱心だったのと対照的に、山本博士は民間の天文ファンを熱心にそだて、大きな影響を残した。

吉田牧師も山本博士の天文同好会員の一人で、一九二二年冬、

1921
十月

伏見の自宅を解放して山本博士の天文講演会を開き、その頃以前記の『肉眼に見える星の研究』を執筆された。そしてこれが日本のアマチュア天文家執筆の最初の天文書で、由木康牧師の序詩「星よわたしの好きな星よ」には津川圭一氏が作曲して巻頭を飾っている。警醒社は今世紀初頭の日本の教界に貢献したが、大正中期から、自然科学書、ことに山本博士の通俗天文書をかなり出している。それよりさき、大正初年には反骨の天文学者一戸直蔵（東奥義塾・青学・二高・東大から東京天文台に入り、のち野に下つて大衆のための天文・科学教育に尽力）の諸著を出した大鏡閣がある。

そして、同志社神学部出身で大鏡閣に入り、のち警醒社に移つた土居啓郎氏（本名・土井伊惣太、一八九九—一九六八）は同社倒産後独立して日本最初の天文書専門の「恒星社」をおこし今日も盛業中で、一九二〇年代からユニークな出版事業を続け、山本一清氏、村上忠敬氏（元広島女学院長）等の著作、戦中以降は有名な野尻抱影氏（一八八五—一九七七、本名正英、実弟は大仏次郎氏）の諸書などを数多く出版し、筆者などその影響を多くうけている。

こうしてみると、日本のアマチュア天文家を育てた人たちには多くのキリスト者たちがあつたことを興味深いことと思う。

（青山学院大学教授・讀美歌研究家）